

先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2015/02/02

またしてもギリシャ不安が再燃か？

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	➡	ギリシャのドタバタ劇が重石 予想レンジ: 125.000~137.500円	2-3
ユーロ/ドル	➡	ギリシャ債務見直し交渉に注目 予想レンジ: 1.09500~1.15500ドル	4-5
ポンド/円	↘	BOEインフレ報告に注目 予想レンジ: 170.000 ~ 181.500 円	6-7
ポンド/ドル	↘	ユーロの動きが波乱材料に 予想レンジ: 1.45000 ~ 1.53000 ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



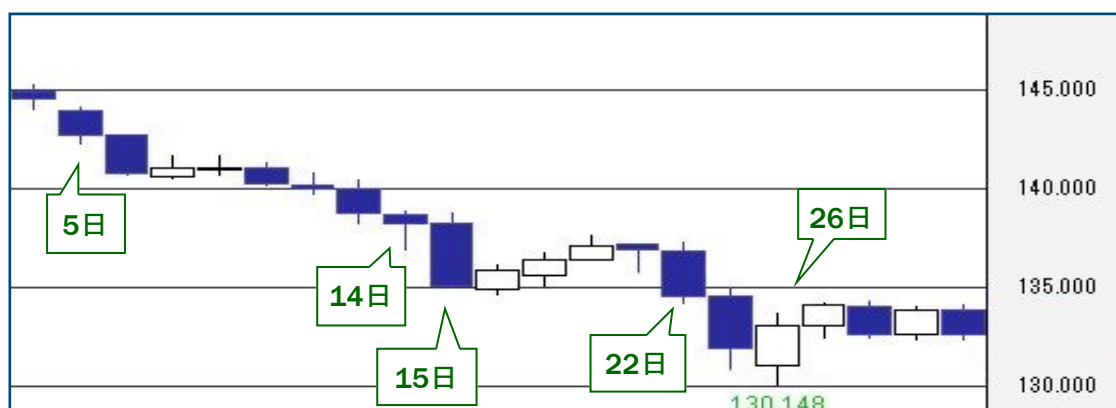
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2015 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 1月の推移

EUR/JPY

1月のユーロ/円相場は130.148～145.321円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約8.4%の大幅下落(ユーロ安・円高)となった。欧州中銀(ECB)による国債買入れを含む本格的な量的緩和と、ギリシャ財政不安の再燃が1か月を通してユーロを圧迫し続けた。26日に付けた130.148円は1年4か月ぶりの安値であり、昨年10月末の日銀追加緩和による上昇分をそっくり吐き出して、さらにユーロ安が進んだ格好だ。



四本値

OPEN	144.926
HIGH	145.321
LOW	130.148
CLOSE	132.638

5日	一部独誌が「独政府はギリシャのユーロ離脱に対処する事が可能と判断」と報じた。年頭に独紙とのインタビューで欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が追加緩和を示唆した事と相まってユーロ売りが進んだ。
14日	欧州司法裁判所(ECJ)がECBの国債購入(OMT)に関して「問題国向け金融支援プログラムに直接関与しない限り合法」などとする見解を示した。これを受けて、ECBの量的緩和観測が一段と強まり137.007円まで下落。しかし、下落基調が続いていた原油価格が反発すると、NYダウ平均が下げ幅を縮めたため138円台に値を戻した。
15日	スイス中銀(SNB)が通貨高抑制策としてユーロ/スイス相場に設定していた1.20スイスフランの防衛ラインを撤廃するとユーロ売り・スイスフラン買いが殺到。ユーロ/スイスが一気に0.85スイスフラン前後まで暴落した動きに連れて、一時135円台まで下落した。その後、ユーロ/スイスが反発すると一時137円台まで値を戻したが、原油価格の反落とともにNYダウ平均が17100ドル台へ下落すると134.999円まで再び軟化した。
22日	ドラギECB総裁が定例理事会後の会見で「月額600億の規模で国債を含めたユーロ建て資産の買い入れを今年3月から2016年9月まで、もしくはインフレの軌道が中期的に2%近くに向けて持続的な調整が見られるまで実施する」と明らかにした。事前予想を上回る規模(月額500億ユーロ程度)の量的緩和が、事実上無期限で実施される事になったためユーロ売りが活発化した。なお、ドラギECB総裁は「買入れはECBへの資本比率に基づく」「買入れは各国中銀が実施」「購入する国債の年限は2年から30年」「利回りがマイナスの国債も購入する」などとも発言した。
26日	前日に行われたギリシャ総選挙の開票速報で、反緊縮財政・反欧州連合(EU)を掲げる急進左派連合(SYRIZA)の大勝が確実となった事からユーロ売りが先行すると、130.148円まで下落して2013年9月以来の安値を付けた。しかし、その後はアク抜け感から一転してユーロを買い戻す動きが活発化。独1月IFO景況指数が106.7と予想(106.5)を上回った事も支材料となり133.711円まで大きく反発した。

EUR/JPY

日経平均

OPEN	17325.68
HIGH	17850.59
LOW	16592.57
CLOSE	17674.39

独 D A X

OPEN	9869.13
HIGH	10810.57
LOW	9382.82
CLOSE	10694.32

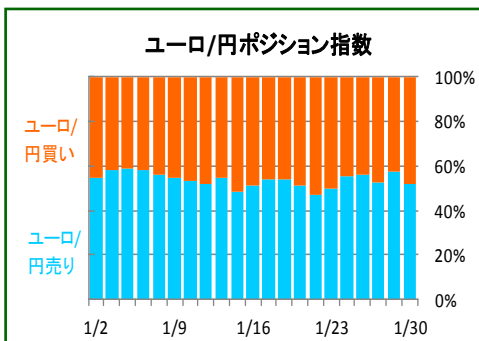
独2年債利回

OPEN	-0.098%
HIGH	-0.090%
LOW	-0.190%
CLOSE	-0.184%

独10年債利回

OPEN	0.541%
HIGH	0.583%
LOW	0.298%
CLOSE	0.302%

1月のポジション動向



2月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・12月日本経常収支・貿易収支(9日)
- ・12月ユーロ圏鉱工業生産(12日)
- ・10-12月期ユーロ圏GDP速報(13日)
- ・10-12月期日本GDP一次速報(16日)
- ・2月独ZEW景況感調査(17日)
- ・日銀金融政策決定会合(17-18日)
- ・1月日本通関ベース貿易収支(19日)
- ・2月ユーロ圏PMI製造業・速報(19日)
- ・2月独IFO景況指数(23日)
- ・1月ユーロ圏消費者物価指数(24日)
- ・2月独雇用統計(26日)
- ・1月日本消費者物価指数(27日)

2月の見通し

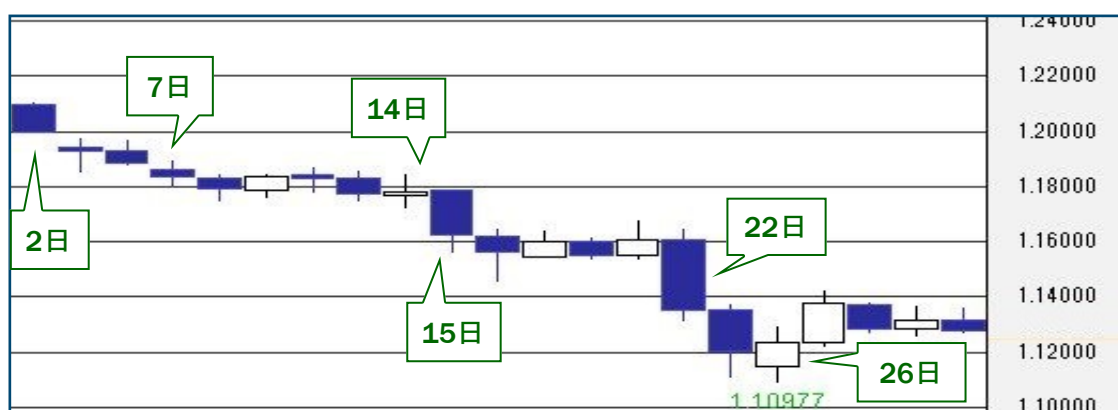
ユーロ/円相場を数カ月のスパンで振り返ると、円とユーロの弱さ比べが攻守所を変える形で進んでおり、昨年12月に149.760円まで上昇(円安)した後、今年に入ると130.148円まで大幅に反落(ユーロ安)した。ユーロ/円相場が足元で、日銀が追加緩和を発表した昨年10月末時点の水準を下回っているのは、ギリシャ問題の再燃が主因だろう。そのギリシャでは、反緊縮を掲げる新政権が、2月末に終了期限が迫る欧州連合(EU)などからの金融支援プログラムについて、延長を要請しない方針を示した。支援融資なしでギリシャが債務の返済を行えるか否かは不透明と言わざるを得ない。こうした交渉がさらに難航すれば、最終的にはギリシャのユーロ離脱が視野に入るが、ギリシャもEUも今のところはユーロ離脱を望んでいないとされる。当面は落しどころが見つからない不毛なドタバタ劇が続く公算が大きく、その間はユーロの軟調地合いが続くと考えるべきかもしれない。(神田)

(予想レンジ:125.000~137.500円)

EUR/USD

ユーロ/ドル 1月の推移

1月のユーロ/ドル相場は1.10977~1.21061ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約6.8%の記録的な下落(ユーロ安・ドル高)となり、7カ月連続で月足陰線をチャート上に記した。欧州中銀(ECB)による国債買入れを含む本格的な量的緩和や、スイス中銀(SNB)による無制限ユーロ買い(スイスフラン売り)介入の放棄に加えギリシャ財政不安の再燃と、ユーロ売り材料に事欠かなかった。こうした中、2015年取引初日の2日に早々と1.20ドルを割り込み、16日には1.15ドルを下抜け、26日には約11年ぶりの安値となる1.10ドル台までユーロ安が進んだ。



四本値

OPEN	1.21019
HIGH	1.21061
LOW	1.10977
CLOSE	1.12815

2日	欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が独紙との年頭インタビューで「物価安定の責務を果たせなくなるリスクが半年前よりも高まっている」「長期間の低インフレに対処する必要がある場合、2015年初めに政策の規模、速度、構成を調整する技術的な準備がある」などと発言。これを受けて22日のECB理事会における追加緩和観測が高まり、一時1.20ドルを割り込んだ。
7日	ユーロ圏12月消費者物価指数は前年比-0.2%、食料・エネルギーを除いたコア指数は前年比+0.8%となった(予想-0.1%、+0.7%)。コア指数の上ブレに反応してユーロ買いが入る場面も見られたが、ギリシャ総選挙に関する世論調査で反緊縮財政を掲げる急進左派連合(SYRIZA)の優勢が伝えられるとユーロ売り優勢に転じた。その後、米12月ADP全国雇用者数が24.1万人増と予想(22.5万人増)を上回った事を受けてドル買いが強まると、1.180ドル目前まで軟化した。
14日	欧州司法裁判所(ECJ)がECBの国債購入(OMT)に関して「問題国向け金融支援プログラムに直接関与しない限り合法」などとする見解を示した。これを受けて、量的緩和観測が一段と強まり1.17273ドルまで下落。しかし、米12月小売売上が前月比-0.9%、変動幅の大きい自動車を除いたコア指数も同-1.0%と予想(-0.1%、±0.0%)を下回った事からドル売りが強まると1.18458ドルまで反発した。
15日	スイス中銀(SNB)が通貨高抑制策としてユーロ/スイス相場に設定していた1.20スイスフランの防衛ラインを撤廃した事を受けてユーロ売り・スイスフラン買いが殺到。ユーロ/スイスが一気に0.85スイスフラン前後まで暴落した動きに連れて、一時1.15674ドルまで下落した。その後、ユーロ/スイスが値を戻すと1.17ドル台まで反発したが、22日のECB理事会で国債買入れによる量的緩和が導入されるとの見方がユーロの上値を抑えたため伸び悩んだ。
22日	ドラギECB総裁が定例理事会後の会見で「月額600億の規模で国債を含めたユーロ建て資産の買入れを今年3月から2016年9月まで、もしくはインフレの軌道が中期的に2%近くに向けた持続的な調整が見られるまで実施する」と明らかにした。事前予想を上回る規模(月額500億ユーロ程度)の量的緩和が、事実上無期限で実施される事になったためユーロ売りが活発化した。なお、ドラギ総裁は「買入れはECBへの資本比率に基づく」「買入れは各国中銀が実施」「購入する国債の年限は2年から30年」「利回りがマイナスの国債も購入する」などとも発言した。
26日	前日に行われたギリシャ総選挙の開票速報で、反緊縮財政・反欧州連合(EU)を掲げるSYRIZAの大勝が確実となった事からユーロ売りが先行すると、1.10977ドルまで下落して2003年9月以来の安値を付けた。しかし、その後はアク抜け感から一転してユーロを買い戻す動きが活発化。独1月IFO景況指数が106.7と予想(106.5)を上回った事も支援材料となり1.12963ドルまで大きく反発した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/USD

NYダウ平均

OPEN	17823.07
HIGH	17951.78
LOW	17136.30
CLOSE	17164.95

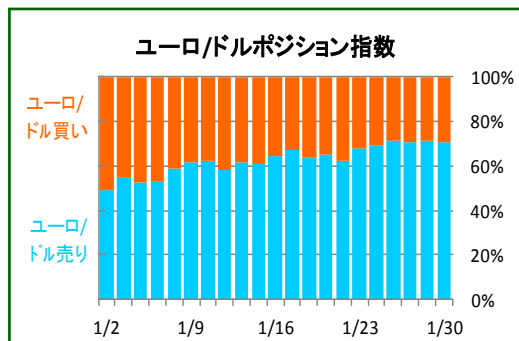
独10年債利回

OPEN	0.541%
HIGH	0.583%
LOW	0.298%
CLOSE	0.302%

米10年債利回

OPEN	2.1712%
HIGH	2.2109%
LOW	1.6357%
CLOSE	1.6407%

1月のポジション動向



2月の見通し

ユーロ/ドルは7カ月連続での陰線引けとなったが、1月の陰線はその中で最大規模であり、比較的眺めの下ヒゲを伴っている。ECBが市場の期待に対して満額回答に近い量的緩和を発表した事(追加緩和の余地が乏しい事)を考えると、1月の下落が「セリングクライマックス」であった可能性が窺える。もともと、これは専らユーロに対しての見立てであり、ドルの先高感を鑑みれば、ユーロ/ドルの上値は重く、反発力は限定的と考えるべきだろう。1月28日に米連邦公開市場委員会(FOMC)が発表した声明で、年内に利上げ開始の基本方針に変化が見られなかった事から、ドルは底堅く推移すると見られる。したがって、ドル高がユーロ/ドルの上値を抑える公算が大きく、下げ止まったとしても大幅な上昇は難しいというのが基本シナリオだ。2月いっぱいには泥仕合が続くと見られるギリシャ新政権と欧州連合(EU)の債務見直し交渉が難航するようなら、安値更新の可能性も捨てきれなくなる。(神田)

(予想レンジ: 1.09500~1.15500ドル)

2月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・1月米ISM製造業景況指数(2日)
- ・1月米ADP全国雇用者数(4日)
- ・1月米ISM非製造業景況指数(4日)
- ・1月米雇用統計(6日)
- ・12月ユーロ圏鉱工業生産(12日)
- ・1月米小売売上高(12日)
- ・10-12月期ユーロ圏GDP速報(13日)
- ・2月独ZEW景況感調査(17日)
- ・米FOMC議事録(18日)
- ・2月ユーロ圏PMI製造業・速報(19日)
- ・2月独IFO景況指数(23日)
- ・1月ユーロ圏消費者物価指数(24日)
- ・2月独雇用統計(26日)
- ・1月米消費者物価指数(26日)
- ・1月米耐久財受注(26日)
- ・10-12月期米GDP改定値(27日)

ポンド/円 1月の推移

GBP/JPY

1月のポンド/円相場は175.760~187.316円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約5.0%の下落(ポンド安・円高)となった。

1月のポンド/円は、月前半に大きく値を下げ、後半に入ると膠着状態となった。月前半は英国の経済指標の冴えない結果や、欧州中銀(ECB)の量的緩和に対する期待からユーロ/円が下落した事に連れて下落。さらに、スイス中銀(SNB)の政策変更を受けた混乱なども重石となった。ただ、月後半に入ると、日英どちらの金融政策も変更期待が後退する中で方向感に乏しく、176円前後から180円前後で概ね推移した。



四本値

OPEN	186.584
HIGH	187.316
LOW	175.760
CLOSE	177.080

2日	英12月PMI製造業が52.5と市場予想(53.6)を下回り、かつ前月分の下修正(53.5→53.3)などを受け、ポンド/円は下落。その後も、ECBの追加緩和観測が強まり、ユーロ/円が下落した事に連れて下値を切り下げた。
6日	英12月PMIサービス業が55.8と市場予想(58.5)を下回った事や、原油安・主要国株安などが重石となり、ポンド/円は下落した。
15日	スイス中銀(SNB)がユーロ/スイスの下限(1.20フラン)撤廃を発表すると、スイス株主導で欧州株が一時全面安となり、円高が進行。ポンド/円は下落した。下げ一服後も、米金融機関の決算が冴えなかった事などを受けてNYダウ平均が軟調に推移し、ポンド/円は下値を切り下げた。
20日	ECBの追加緩和期待を背景にユーロ/ポンドでユーロ安・ポンド高が進むと、ポンド/円もポンド買い優勢となった。
21日	日銀が金融政策の据え置きを発表すると、事前に付利引き下げの噂が流れて円安が進んでいた反動で円高が進行。黒田日銀総裁が付利引き下げの議論がなかった事を明らかにするとこの傾向に拍車がかかった。その後に発表された英12月雇用統計は、失業率2.6%(予想通り)、失業保険申請件数2.97万件減(予想:2.50万件減、前月分2.69万件減→2.96万件減)週平均賃金3カ月は前年比+1.7%(予想通り)、9月-11月ILO失業率は5.8%(予想:5.9%)と概ね良好な結果だったが、同時発表の英中銀(BOE)の金融政策委員会(MPC)議事録において、前回まで利上げを主張していたマカファーティ委員とウィール委員が金利据え置き賛成に回った事を受けて、ポンドは急落した。もっとも、NY市場に入り、NYダウ平均が上昇すると、ポンド/円は下げ幅を縮めた。

GBP/JPY

日経平均

OPEN	17325.68
HIGH	17850.59
LOW	16592.57
CLOSE	17674.39

FTSE100

OPEN	6566.09
HIGH	6864.97
LOW	6298.15
CLOSE	6749.40

英2年債利回

OPEN	0.446%
HIGH	0.461%
LOW	0.309%
CLOSE	0.351%

英10年債利回

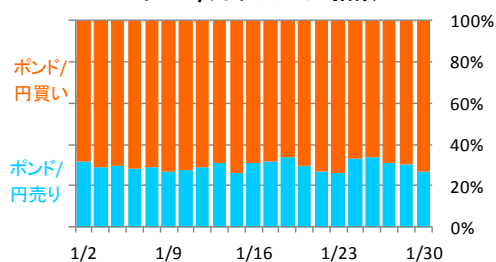
OPEN	1.756%
HIGH	1.807%
LOW	1.325%
CLOSE	1.330%

1月のポジション動向

2月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/円ポジション指数



- ・BOE金融政策発表(5日)
- ・BOE四半期インフレ報告(12日)
- ・日10-12月期GDP・一次速報(16日)
- ・日銀金融政策決定会合(17-18日)
- ・英1月消費者物価指数(17日)
- ・英1月雇用統計(18日)
- ・BOE議事録(18日)
- ・英1月小売売上高指数(20日)
- ・日1月全国消費者物価指数(27日)
- ・英10-12月期GDP・改定値(27日)
- ・英利上げ時期を巡る要人発言

2月の見通し

日本に関しては、当面は金融政策は据え置きとなると見る。物価上昇率については低く抑えられている状態が続いているが、政府筋から日銀の量的・質的緩和について「当面は追加緩和の必要がない」と見解を固めていた事が報じられており、政府サイドからの要請も特にないと見られる。

一方、英国については、BOEの四半期インフレ報告が注目される。足元の英国では経済指標に冴えないものが目立ち、1月のMPCでは、これまで0.25%の利上げを主張していた2人のメンバーがその主張を取り下げるなど、利上げ時期の見通しがどんどん後ろにずれてしまっている。今回のインフレ報告でインフレや経済成長率の見通しが引き下げられれば、一段と利上げ時期の見通しを後退させる動きに拍車は掛かり、ポンドの押し下げ要因となりそうだ。

この他、ギリシャとトロイカの財政再建や支援についての交渉の進捗を受けたユーロの動きにも注意したい。急激にユーロが動けば、ユーロ/円、ユーロ/ポンドなどを挟んで、ポンド/円も影響を受ける事が起こり得る。(石川)

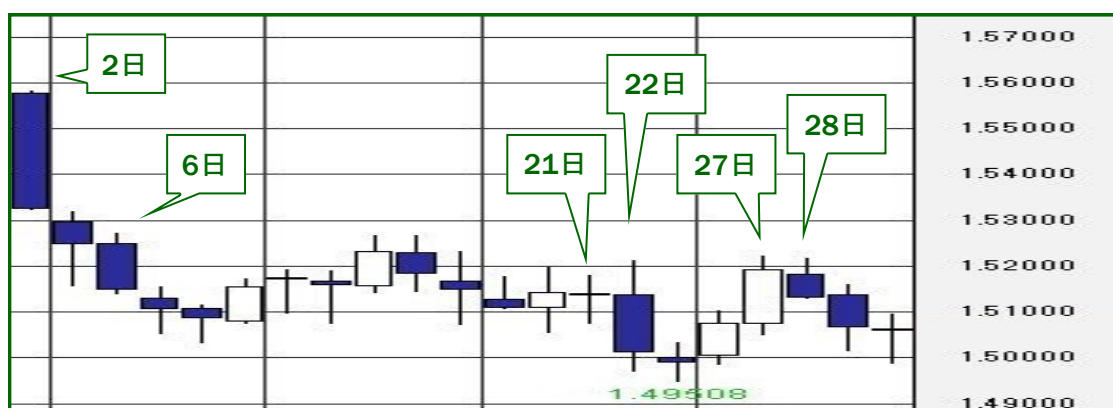
(予想レンジ: 170.000~181.500円)

ポンド/ドル 1月の推移

GBP/USD

1月のポンド/ドル相場は1.49508~1.55834ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約3.3%の下落(ポンド安・ドル高)となった。

月初に英国の指標結果の内容が良くなかった事や、欧州中銀(ECB)の追加緩和観測を背景とするユーロ/ドルの下げに連れて大きく下げたが、その後は英米双方の金融政策について変更期待が持てない中で方向感に乏しい状態が続いた。



四本値

OPEN	1.55784
HIGH	1.55834
LOW	1.49508
CLOSE	1.50615

2日	英12月PMI製造業が52.5と市場予想(53.6)を下回り、かつ前月分の下方修正(53.5→53.3)などを受け、ポンド/ドルは下落。その後も、欧州中銀(ECB)の追加緩和観測が強まり、ユーロ/円が下落した事に連れて下値を切り下げた。
6日	英12月PMIサービス業が55.8と市場予想(58.5)を下回った事や、原油安・主要国株安などが重石となり、ポンド/ドルは下落した。
21日	英12月雇用統計は、失業率2.6%(予想通り)、失業保険申請件数2.97万件減(予想:2.5万件減、前月分2.69万件減→2.96万件減)週平均賃金3カ月は前年比+1.7%(予想通り)、9月-11月ILO失業率5.8%(予想:5.9%)と概ね良好な結果だった。しかし、同時発表のBOE議事録において、前回まで利上げを主張していたマカファーティ委員とウィール委員が金利据え置き賛成に回った事を受けて、ポンドは急落した。
22日	ECBが「月600億ユーロの資産買入を3月から2016年9月まで、もしくはインフレの軌道が中期的に2%近くに向けた持続的な調整が見られるまで実施」等とする量的緩和策を発表すると、ユーロ/ドルが失速。これに連れてポンド/ドルも下落した。
27日	米12月耐久財受注は前月比-3.4%(市場予想:+0.3%)、輸送用機器を除いた数値が同-0.8%(同:+0.6%)と、プラス予想に反してマイナスという結果になった。これを受けてドル安が進んだ事などもあり、ポンド/ドルは上昇した。
28日	米連邦公開市場委員会(FOMC)は声明において、「景気はしっかりとペースで拡大」と景気判断が上方修正されていた事からドル買い優勢となった。ただし、同時に「市場ベースでのインフレ期待は大きく低下」「エネルギー安を大きく反映してインフレはさらに低下」とされていた事を受けて米長期金利が低下したため、ドル買いは限られた。

GBP/USD

NYダウ平均

OPEN	17823.07
HIGH	17951.78
LOW	17136.30
CLOSE	17164.95

米10年債利回

OPEN	2.1712%
HIGH	2.2109%
LOW	1.6357%
CLOSE	1.6407%

英10年債利回

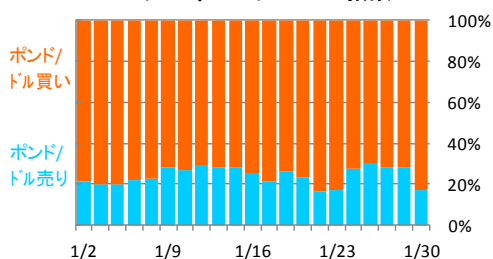
OPEN	1.756%
HIGH	1.807%
LOW	1.325%
CLOSE	1.330%

1月のポジション動向

2月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/ドルポジション指数



- ・BOE金融政策発表(5日)
- ・米1月雇用統計(6日)
- ・BOE四半期インフレ報告(12日)
- ・英1月消費者物価指数(17日)
- ・英1月雇用統計(18日)
- ・FOMC議事録(18日)
- ・BOE議事録(18日)
- ・英1月小売売上高指数(20日)
- ・英10-12月期GDP・改定値(27日)
- ・米10-12月期GDP・改定値(27日)
- ・米利上げ時期に関する要人発言
- ・英利上げ時期を巡る要人発言

2月の見通し

ポンド/ドルは2009年以来の7カ月連続の陰線引けとなった。米国が利上げに向けて歩みを進める一方、英国は冴えない経済指標や抑制された物価動向、ユーロ圏経済の不安定さなどの影響を受けて利上げ時期の見通しがどんどん後退しており、これがポンド/ドルを押し下げ続けている。

2月の英国については、BOEの四半期インフレ報告が最も注目される。足元の英国では経済指標に冴えないものが目立ち、1月のMPCでは、これまで0.25%の利上げを主張していた2人のメンバーがその主張を取り下げるなど、利上げ時期の見通しが後ろにずれてしまっている。今回のインフレ報告でインフレや経済成長率の見通しが引き下げられれば、利上げ時期の見通しを後退させる動きに拍車がかかり、ポンドの押し下げ要因となりそうだ。

他方、米国の方は、次回のFOMCが3月で、雇用統計を3月発表分も確認できるという事もあり、経済指標などをみて一喜一憂するような展開は望みにくい。2月のポンド/ドルは基本的に、英国の利上げ時期についての思惑を調整する形の動きが散発的に見られる事があっても、大きな方向感を持った値動きにはなりにくそうだ。

ただ、ユーロ圏の動向には引き続き要注意だ。ギリシャが反トロイカの姿勢を強めれば、財政再建頓挫・支援ストップ・ユーロ離脱などの様々なネガティブな観測を喚起する可能性がある。その際にユーロが大きく荒れれば、ポンド/ドルはユーロ/ポンドやユーロ/ドルの動きに翻弄されて、値が荒れる事もあり得る。常に気を配っておきたい波乱材料だ。

なお、ポンド/ドルの下げが加速し、2013年安値の1.48120ドルを割り込んだ場合、1.45ドル付近まで下げ余地が一段と拡大するものと見る。(石川)

(予想レンジ: 1.45000~1.53000ドル)